

『後撰集新抄』翻刻(七)

日向一雅

#### A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (Ⅵ)

---

*Gosenshū Shinshō*, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67, 68, 70, 71 and 72 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III, IV, V, VI and VII. For this issue I have transcribed volume VIII

後撰集新抄冬 八 (外題)

後撰和歌集卷第八新抄

冬歌

題しらず

よみ人<sup>も</sup>不知<sup>抄</sup>

四三

初しぐれふれば山方ぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらん

○此歌は、上<sup>秋</sup>下に出たれば、此所には除くべきなり。

四四

はつ時雨ふるほどもなくさほ山の梢<sup>あまたに色づきにけり 異本又は則集</sup>  
<sup>紅葉 六帖 いろつき 一本</sup>あまねくうつろひにけり

○ほどもなくとあまねくとを、かけ合せたるなり。一首の意は明らかなり。

四五

神な月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬の初なりける

※ ふりみふらずみは、俗言に訳していはんには、フルヤウニモアリ降ラスヤウニモアリ  
テ、といふに近し。山高みなどのみと、もとは同じけれど、訳していへば異なる。

○ふりみふらずみは、ふりもしふらずもしいはんが如し。時雨のふるさま、まことにさるものなり。

かくさまのみの言は、まりの約りたるなり。まりはもありの約りたるな(二)と、縣居ノ大人はいはれたり。然らば、ふりみふらずみは、ふりもありふらずもあり、山高みは、山高まり、風早みは、風早まり、と心得べきなり。すべて詞のもとを解くと、俗言に訳して解くとは、異なる事あり。こは上秋上に

も安く  
へり。

## 四六

冬タくればさほの河瀬ラにあるたづツもひとりねがたき音をぞなくのみぞなくなる異

もなく説 伊勢集

○抄には、冬の夜長く床さむき頃、佐保の河への鶴の音を聞て、我身をつみてあはれめる心なるべしとあり。此意と見んには、上下の句の間に、我如くと云ことを加へて心得べし。然れども、此歌独ねがたきとあるは、恋の意の如くも聞ゆるなり。伊勢集の方、三ノ句のとあるは、ある鶴の如くと云意にて、以上は序なれば、ことに穩なるさまなり。師も恋の歌なり、抄の説いかゞなりといはれたり。

## 四七

ひとりぬる人のきかくにかみな月にはかにもふる初しぐれかなニウ

○さらでもわびしき、独寝の身の聞くのに、十月の空は俄にも時雨のふる事かなとなり。三ノ句きかくには、聞くにの延はりたるにて、即、きくといはんが如し。に文字力あり。此に文字などは、云々なくといふ間なには、軽く添へたるが如きとは異なり。はかにもといへるは、雲雨の初て降る事にはあらず。降来るさまの、いとあはた、しきをいへるなり。万葉十六長歌に、「将死命爾波可爾成奴シナシイノチニハカニナリヌ云々」とあるも、急キウにといはんが如し。師も此所のはかは、疾ハヤくといふに近く、アハタ、シク、コトくシク、サワガシク、コチタク、など云意に通へり。万葉にはやといふ言を、甚の意にいへる事あり。卷八に、「やどにある桜の花に今もかも松風疾ハヤみつちにおつらん。十一に、「言急者中はよコトハヤませ云々、とあるも、初句はこちたくはとよみて、甚しき事になるなり。又日本紀十三に、「ことコト三ミめでははやくはめです、といへるも、早ハヤに甚の意あり。これら考へ合すべしといはれたり。初時雨とある、初の月になつむべからず。こは十月になりてはじめてあるをいへるにて、さしも歌の意にか、はることにあらず。

四八

秋はて、しぐれ<sup>しもに異</sup>ふりぬる我なればちる言の葉をなにかうらみむ

○抄に、心かはりし人の、契し詞をも、外にもらしなどせしをり、よめるなるべし。時雨ふりぬると、我身のふるされたるにいひかけて、言葉のおち、るを、落葉にそへたるなり、とあるがごとし。猶思ふに、ちる言の葉とは、文など他<sup>ほか</sup>へちらしたる事あるなどをいへるにも有べし。

四九

ふく風は色も見えねど冬くればひとりぬるよの身にぞしみける<sup>ある人の六帖ぬ異</sup>

○二ノ句、菅家万葉には、「ゆくもしらねど、とあれども、そはよろしかるべし」くも思はれず。六帖と異本とのにては、いづれにてもあるべし。一首の意は明らかなり。六帖、「吹くれば身にもしみける秋風をいろなき物と思ひけるかな。

五〇

秋はて、我身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり<sup>と一本又抄そ一本ける異</sup>

○此歌は、古今恋五に、小町「今はとて我身時雨に云々。と出たり。我身が古きものになりつれば、今は厭給ひて、はやく契りおき給へる詞まで、違ひ侍る事よ、となり。時雨は、ふりといひ、又言の葉、うつろふ、といはん料なりと、鈴屋大人いはれ、此歌は、二二三四五と句をつづけて心得べしと千秋主いはれたる。されど、かく句の次第をかへて心得といふ事は、まことにはあるまじき事なり。すべて、詞はいさ、かの前後ありても、其心はへ必違ふ物なればなり。此事は上にもいへり。然れども、又初学の「わたり大ひねを心得んには、便ある事にて、古くよりいひ来れる事なれば、古き人の説ある所などは、今も必しもはぶかず。（三三）

五一

かみな月時雨ばかりはふらずしてゆきかてにさへなとかなるらむ<sup>のみ伊勢集</sup>

○此歌は、伊勢家集に、男云々、かへし女、云々、と十二首ばかりの贈答ありて、但し此贈答は、仲平公などにはあらず、他の男の、ただ戯事のこととあり。是にてよく聞えたり。雪がては、雨に雪のまじるをいふ。此返しに、「雪まぜて見るべき物をかみな月時雨に」袖の初雪もこそすれとあり。此歌は少し心得がたけれど、初雪もこそすれとあるは、此「雪がてにのみをうけたるなれば、此詞を心得るにはよろし。」夫木一、延喜三年、三月廿七日、京極ノ御息所歌合、初春、よみ人しらす。「ゆきがてにふく春風ははやけれど青山なればさむからなくに、などもありて、和ノ字合ノ字などの意の詞俗言に、カテ、クハヘテ、など云意なり。万葉十六に、「露をも思ふなるを、行難げと云意にかけていへるなり。時雨も雪もふれば、それにつ、まれて、行難きさまにはいかでなるらんとなり。三三」さへの詞は、歌の表の、時雨に雪の添はる方にいへるなり。されど、家集にのみとある方、まさるべく覚ゆ。

## 四三

かみな月しぐれと、もに神なびの杜の木の葉はふりにこそふれ

○意かくれたる所なし。「ふりにこそふれは、降る事のしきりなるをいふなり。上夏に、「聞にきこえて、とある所に委しくいへるが如し。

## 四四

女につかはしける

たのみ木もかれはてぬればかみな月時雨にのみもぬる、ころかな

袖 抄又異本

○我がよるべと頼たる君の、絶果たれば、今は涙に袖のみ濡る、ことかな、といふを、笠 宿かさやどりと頼む木陰の無くなりしより、時雨に袖のぬる、にそへていへるなり。恋歌なる事は論なし。末句は、異本抄本ともに、袖とある方まさるべし。(四オ)

山へ入るとて

増基法師

四五

かみなづきしぐればかりを身にそへてしらぬ山ちにいるぞ悲しき

○今、山に入んとするに、世にありし時のものにて、身に添ふ物とては、ただ時雨のみなるぞ悲しきとなり。或人は、時雨ばかりと云に、我身の旧ぬる事をよせなるにもあるべしといへり。又思ふに、時雨は、山廻りすといふ物なれば、山に入るといふによしありて、かくいはれたるならんか、とも思へど、いかゝあらん。すべて、かゝる歌などは、あまりにこまやかに見ては、かへりて一首のあはれを失ふことあるものなればなり。新古今雑上に、「世をそむきなんと思ひ立てころ、月を見てよめる、寂超法師、「あり明の月より外にたれをかは山路の友と契おくべき、とあるなどをも思ひあはすべし。二の句、ば（四）かりの詞は、「見ゆばかりなる秋の夜の月、」「（見ゆばかりなる秋の夜の月、）」「うきものはなし、などあるとは異にて、」而（俗言に）「（俗言に）」意なり。かくつかふは、後世の格のごとくなれども、猶然らず、古くよりかく両様に遣へり。古今更、「石上ふるき都の時鳥声ばかりこそ昔なりけれ。菅家万葉、「天川秋の夜（バカ）並よどまなん流るゝ月の影をとむべく、など猶例あり。しらぬ山路は、兼てわけ入たる事もなき山（案内モ知ラス山といふ、）意なり。世を背（ソムキ）て入る山をいふなり。新古今雑上、「いつか我昔の袂に露おきてしらぬ山路の月を見るべき、などもあり。

十月ばかりに、大江千古がもとに、あはんとてまかりたりけれども、侍らぬほどなれば、かへりま（れりけるを）う一本。で来て、尋て遣はしける

藤原忠房朝臣

○侍らぬほど、は、千古主の物へ行て、家に居られざる間、と云（五）事なり。さるゆゑに、忠房

四

朝臣は、いたづらに帰来て、さて千古主の行て居る、所を尋て、此歌をやられたるなり。

四

もみぢ葉はをしき錦と見しかども時雨と、もにふりてこそ出てそ 六納又一本し

○此歌の末句、今の本に、ふりてこそと有て、詞の玉緒五の巻にも、こそをしと結ぶ格の中に出されてはあれども、今思ふに、此歌、詞のうへ、ふりてとのみ云ては、趣意聞えがたし。ふりてくといふ事、時雨にはさる事なれども、人の帰来る事にはいふべくもあらねばなり。契沖法師も、ふり出での誤かといはれ、六帖には、「ふり出で而曾来之そこしとあるに従ふべし。ふりてと云て、ふり出る事には、もとよりなるべくもあらねば、必出でぞとあるべき詞なり。ふり出の、出の詞に用あればなり。こはもと、ふりて、ぞとやうにありしを、てこそとは誤れるなる（五ウ）べし。かくて一首の意は委く次の歌の下にいふべし。

返し

大江千古

四

もみぢ葉もしぐれもつらしまれに来てかへらん人をふりやとめぬ

○此歌、末句のてにをは、言葉の玉緒、四の巻六納に、やはの意のや、とは挙げられたれども、古今一、「見てのみや人にかたらん桜花手ごとに折て家づとにせん、同五、「うゑし時花待遠にありし菊うつるふ秋にあはんとや見し、同十一、「秋の田のほのうへをてらす稲づまの光の間にも我や忘る、などの歌と同じくついでられたるは、同玉緒の巻十二丁に、○やはと挙げられたる、古今一、「春の夜のやみはあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくる、同八、「もろともに鳴てとめよ（六ナ）きりくす秋の別はをしくやはあらぬ、など、同じ類にて、たゞ意のうらへ（カ）反る（イ）のみや（ハ）と見られたるさまなり。然るに此歌冬後撰なるは、やはの意なる事はもとより論なく、其中にても、ことに一ふしあるやはの意にて、同書に上の十二丁、○や



はのつゝきに、又一格、古今二、「桜花はるくは、れる年だにも人の心にあかれやはせぬ、同三、「時鳥こゑも聞えず山彦は外に鳴音をこたへやはせぬ、伊勢集、「秋の野に出ぬときくを花す、きしのびに我をまねきやはせぬ、後撰十一、「道しらでやみやはしなぬ逢坂の関のあなたはうみといふなり、など出されて、件の歌どものやはは、一つの格にて、初学の輩の心得がたく思ふ事なり。古今の、「あかれやはせぬは、何とてあかれぬ事ぞ、あかれよかしといふ意、「こたへやはせぬは、何とてこたへぬ(六)事ぞ答へよかしといふ意なり。其外のも、これになぞらへて心得べし。後撰なる、「やみやはしなぬも、やみやはせぬ、と同意の辞なり、といはれたる歌どもに同じきなり。よく味ひ見てさとるべし。この(き)に(み)ち葉はをし贈答二首の意は、忠房朝臣、千古主の、他へものせられて、なきほどの家に來て、さて其、千古主の帰て居らる、所を尋て、いひやらるゝに、「もみち葉はをしき錦と云々とは、たゞ今君が家に物したるに、庭の紅葉の、いとくうるはしくて、あはれ此紅葉を、ふり捨て去帰らんは、をしき錦なる事とは見つれども、君の居給はねば、せん方なさに、時雨ともろともに、ふり出て帰侍つるよ、といふなり。ふり出ての、ふりの詞は、ふりすてのふりに同しくて、(ふり)は(へ)の(ふり)に(近く)、(意少し)軽きなり、いざとて立出るやうの心ばへなり。故にふりてと云ては、詞(七)と、のはざるなり。末摘花巻に、「まへの前栽の雪を見給ふ。ふみあけたる跡もなく、はるくとあれわたたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出てゆかん事もあはれにて云々、などもあり。さてかくいひおこされたる返しなれば、「もみち葉も時雨もつらし云々は、さる事や侍けん。さては、我宿なる、紅葉も時雨も、我ためにつらき心なるよ。君のまれに來給ひて、さやうにいたづらに帰給ふを、何とてふりはとめぬ事ぞ。必ふりとゞむべきにてありし物を。といひて、下の意には、今しばし、我が帰らんを待も見ずして、帰給ふ君の心もつらきなり、といふをふくめられたるなり。何とてふりとゞめざりしぞと、

紅葉と時雨をとがめたるが、此歌の意味ある所にて、これ彼、「ほかになく音をこたへやはせぬ、など、全く同例のてにをはなり。よく味ひ見<sup>モ</sup>てさるとるべし。もしこれを、古今五の、「うつろふ秋にあはんとや見し、など、同格と見る時は、まれに来て、いたづらに婦給ふを、ふりはとどめざりしや、ふりとゞめ侍つらんを、といふ意となりて、直に婦たる人<sup>タメテ</sup>に對ひて恨る意になるなり。<sup>かく婦たる人<sup>ナキ</sup>に對ひてうらむる意も、なきにはあらねど、そは裏<sup>カマ</sup>シタに</sup>ふくめたるにて、歌の表は、紅葉と時雨をとがめ、さては上句、「もみぢ葉も時雨もつらしといふ事、さらに合はず。よくたる意のみなり。此けちめをよくわきまふべし。」さては上句、「もみぢ葉も時雨もつらしといふ事、さらに合はず。よく思ふべし。師翁云、わが翁、詞の玉緒に、思ひ及ばざりつることゝも、こたび此抄くはしく考ふるにつきて、くはしくあげつらへる、美石が此考いとし、此説にしたがふべしといはれたり。

だいしらず

よみ人しらず

四七

神な月かぎりと思ふもみぢ葉のやむ時もなくよるさへにふる<sup>そ異</sup>（八オ）

○紅葉は、十月を限の時と思ふにや、止む時もなく云々、と云なるべし。順家集に、<sup>此葉を撰ばる、時</sup>「神な月のつごもりに、御題を封じて下し給へり。かみな月かぎりと思ふもみぢ葉のとあり。おの／＼歌を奉るに、  
「かみな月はては紅葉もいかなれや時雨と、もにふりにふるらん、とあるをも引合せて思ふべし。

四八

ちはやぶる神垣山<sup>南異</sup>のさかき葉はしぐれに色もかはらざりけり<sup>さへ一本</sup>

○榊は、霜雪に色の変らぬ物なればなり。古今神遊、「神がきのみむろの山のさかき葉は神のみまへにしげりあひにけり、などの類なり。<sup>神の御上にかけていへる説もあらず、れどそは此歌にてはかなはず。</sup>神垣山は、大和国といへれど、いづれの山と、たしかにもしられぬさまなり。されど一所の名にてはあるべく思はるれば、猶よく考ふべし。さかきは、荒木

田久老神主万葉(八ウ)考概落の説に、櫓シキをいふなるべしといはれたるぞ、古歌にも、櫓には多く香をよみたるにもよくかなひ、もとよりより所もある説にて、したがふべくおほゆ。其中に、神武天皇の大御歌に、伊智佐介伎未過於朋鷄句イササケキミノオホケケヲ云々とあるは、美者々木ミヤクキなるべしといはれたれど、今思ふに、なほ櫓なるべくや。櫓にも実ミの赤く、いと美麗ウルハしきが、数多くふさやかになるもあればなり。そは、南天燭ナルデン俗にナンデンとも云木、などの実の大さにて、いとてもでたき物なり。こは櫓の中にての一種なり。香氣は、実のなきにくらべては、いさ、かおとりさまにはあれど、なほ櫓の中の一種なる事は、疑なく見ゆるなり。楓の落葉の全文、また其中に、いさ、かおとるべき事などのあるは、別に記し出すはし。

すまぬ家。見にま。うて来て、紅葉にかきて、人に一本いひつかはしける (九オ)

枇杷左大臣

○すまぬ家にとは、今は絶て、我が通ひすまざる家といふことなり。此作者仲平公、太政大臣の舞にとられ給へるをりの事なり。伊勢家集云、「時のおほいまうちぎみのむこにとられにけり。其をりにぞおやもさればよいひければ、女はづかしと思ふほどに、此男の許より人來り。コハマツシ、消息ナドアリシヲイフコト、此女の家は、五条わたりなるに來て、コレ仲平公ノ、ミツカラ來タマヒシナルベシ。五かきの紅葉に、歌を聞ユ。条わたりなるにトアルナド、ヨク味ヒ見ルベシ。なんかきつけ、る。「人すまず云々。女心うき物から、あはれにおもほえければ、「涙さへ云々とて、ねずもちの紅葉につけてやりける。男いとをかしと思ひけり。女、今は我をはよもとはじと思ひて、大和 (九ウ) へくだるとて、男の許へやりける。「三輪の山いかに待見ん年ふとも云々とあり。

四元

人すまずぬあれたる宿をきて見れば今ぞ木の葉紅葉の伊勢集は錦おりける

○久しくすまぬ家なれば、荒たる宿といへり。かく古たる里なれど、今日来て見れば、木の葉の錦なるとなり。錦着て古郷へ帰る心をふくむるにや、と抄に見えたり。けに下ノ句は、かの大和へ下るべきけしきなどあれば、そをふくめられたるならんか。又は、我が通ひすみたるころよりは、うるはしくなりたり、と云意にてもあるべし。

かへし

いせ

四〇

なみださへしぐれにそひてふる里は紅葉の色もこさまさりけり宿異  
そまされる一本

○見すてられしを、歎く涙の紅なるが、時雨にそひてふれば、紅葉も濃きさのしほまされりとなりと、抄にあるが如し。涙さへのさへは、二ノ句のふると云へかゝるなり。涙の大かたならず、いと多きさまをいへるなり。涙も時雨と同じやうにふるといふなり。又家集に、ねずもちの紅葉につけてとあるは、物思ひに不寝の意をふくめられたるにもあらんか。但しこは、此集にては、さしも用なき事なり。又、我友、横山直磯云、此二首、素性集に、「みづのをの御かどのかくれ給へるを、白河にかへさのほらへし侍しに、「人すまずあれたる宿をきて見れば今ぞ木の葉は錦なりける。又こきもみちを見るに、をりしも時雨すれば、「かみな月時雨にそひてふる里は紅葉の色もこさまさりけり、とあり。今思ふに、こは素性集の方、歌のもとなるを、左大臣殿の、やがて伊勢ノ御の許へはやり給へるなるべし。末句もとのまゝにては、今やり給ふ意に（十）すこし合はざれば、なりをおりと奈かへ給へるなるべし。一首の意は、左大臣のやり給ふ方にては我が通ひすむころは、此方よりも、よろづうしろ見などもして、見ぐるしからずありしが、今はいかに荒たるならんと思ひて、来て見れば、思ひしとは大に違ひて此頃は、木葉の色づきて美しき錦と見ゆる事よと云て、下ノ句に、伊勢の住

四六

あらさぬ意はこもれり。さてこの住あらさぬさまにて思へば、今は他によきうしろみの人のある事と見ゆる事よ、と云意をふくめ給へるなるべし。然れば、伊勢ノ御も、又同じ素性集の古歌を、少しかへて、君は素性集の歌をおこせ給ふゆゑに、我も其素性にて答へ侍りと云した心にて、「なみださへ云々は、君は木葉の色付て、うつくしきを御覧じて、我を疑ひ給ふが、今一段うらめしく思はれ侍り。そは何ゆゑなれば、彼もみぢ(十二)の色のよきは、もと君の見すて給ふよりの事に侍り。かく君に旧ふるされたる古里なれば、我も毎日く、泣てのみ暮し侍り。其涙が此頃の時雨と、もに降り侍るによりて、一きは紅葉の色がうつくしく、錦と見え侍るなり。もとより我が此頃の涙は、紅涙にて侍るものと云なるべし。かく見ても、二首の歌の意は、おほく異なるならねと、素性集の歌を用ひたるならんといふが考なり。美石云、此説もおもしろし。二首ともに、素性集に、詞書もありて入たるは、いかにもゆゑありげなり。然れども、素性集のみならず、古人の家集といふもの、すべてたのみ難きのみ多ければひたぶるには従ひがたし。されば、此説も一説とすべき事なり。

だいしらず

よみ人しらず

うきてぬる 興風集  
冬の池のかものうはげにおく霜のきえて物思ふころにもあるかな(十二)

夜の六

○恋歌なり。かものうはげには、鴨の上毛になり。おく霜のまては、例の、おく霜の如くの意にて。きえてといはん序なり。

きえてと物思ふは、心の消入るをいふなり。古今恋二「かきくらしふる白雪の下ぎえに消て物思ふころにもあるかな。

おやのほかにまかりて、おそくかへり。あり抄 ければ、つかはしけるまて来一本 いひ異

人のむすめの、やつ。なる一本 なりける

○つかね緒云、人のむすめの云々といふ事、詞書に書つゞくべし。さておそくかへるといふは、すべて帰る事の遅きよしにて、いまだ帰らぬをいふ詞なり。

かみなづきしぐれふるにもくる、日を君まつほどはながしと思ふ時一本

○上句は、時雨のたゞ一しきりに、早く降過る、其時雨のふる間に暮る（十三）るほどなる、冬の短き日なれども、といふなり。

## 四六

題しらず

## 四六三

身をわけて霜やおくらんあだ人の言の葉さへにごとかれもゆくかなて六帖

○抄に、我方にはかはる事もなきに、彼方には枯ゆく故に、身をわけていふなるべし、とあるが如し。我身と人の身とをわけてといふ意なり。言の葉さへ枯ゆくとは、契たる詞の、末とげぬさまになりゆくをいふなり。恋歌なる事はさらなり。師云、古今恋五に、「秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらにならん、とあるも、同じ心なり、考へ合すべしともいはれたり。こは身をわけてといふ詞の事なり但し、遠鏡の説にては、又こと／＼なり。そは見ん人の心にまかすべし。

冬の日、むさしに遣しける十三

○武蔵は、宮仕の女房などなるべし。

四四

人しれず君につけてし我袖のけさしもとけずこほるなるべし なりけり 異

○為家卿抄云、つけてし我袖は、心をつけたるなり。けさしも氷るは、霜をよせたり、と抄にはあれども、いかゝあらん。おほつかなし。つけてし袖とは、ふれてしと云と、おなじ意なるべし。一たび打とけて、ふれたる袖の涙の、今朝はとけず云々、と云なりと、師翁いはれたり。思ふに、こは女に逢たる、後朝の文の中なる歌にて、上句は、夜べいとみそかに逢たる時に、互に涙を流して、ぬらしたる我袖の、と云ことなるを、さる深く忍びたる中の事なれば、逢たる事の、きはやかに聞えざるやうに君につけいへるなるべし。其兩人の間にては、たしかに其事としられ、他より見聞ては、たしかならぬやうにいふ事は、恋（十三）の上になある事なり。下ノ句は、かのぬらしたる袖の上に、猶涙をそへて、かはく間なきを、こは夜べの涙の氷たるなるべしといひて、それときかせたるなるべし。

四五

題しらず

かきくらし くづし あられふりしけ白玉 は兄賢（ミルガニ）首万 をしける庭とも人のみるべく くもり 六帖

○ふりしけは、降しきれなり。敷けにはあらず。四ノ句は、敷る庭ともなる事、さらにいふまでもなし。一首の意は明らかなり。庭などに玉を敷く事は、万葉六、「あらかじめ君来まさんとしらませば門に宿にも珠しかましを、」玉敷てたまましよりはたけそかに来たるこよひしたぬしくおもほゆ、同十八、「ほり江にはたましかましを大きみの御舟こがんとかねてしりせば、」玉しかず君がくいていふ 梅而堀（十三） 江にはたましきみて、つぎてかよはん、など古歌にもいと多く見えたり。玉とは、美しき石をいへるなり。 し必 も、珊瑚瑠璃などの類の、今も古き山陵などに、小さき白石の、美しきを敷たるあり。これ当時敷たるが残れるなり。 ソノカミ

四六

かみな月しぐる、時ぞみよし野の山のみ雪もふりはじめける  
あし引の 六帖

○初二ノ句は、都の空のしぐる、時ぞ、と云事なるべし。山べはことに寒さの強き物なればなり。古今上に、「み山には松の雪だに消なくに都は野べの若菜つみけり、とあるは、春のや、暖になる事をいへるにて、今の歌と反対ながら、意は通へり。又、続古今に、定家卿冬 題を「さえくらすみやこは雪もまじらねど山のは白き夕暮の雨、とよみ給へるは、今此の歌を思ひ給へるにやあらん。(十四才)

四七

けさの嵐さむくもあるかみよし野の山かきくもり雪ぞふるらし  
けくもあるかみよし野の 六帖 くらし 異

○上の歌と合せ見て、意明らかなり。

四八

黒髪のしろくなりゆく身にしあればまづ初雪をあはれとぞ見る  
思ふ 軋恒集

○重之集、「山のうへとよそに見しかどしらゆきはふりぬる人の身にも来にけり。

四九

あられふるみ山の里のわびしきは来てたはやすくとふ人ぞなき  
悲しきは 六帖 思ふ 軋恒集 一本

○たはやすくは、たやすくといはんが如し。末摘花巻に、「なみくのたはやすき御ふるまひならねば云々、などもあり。さる山里にて、冬はことに往来もかたければ、来訪ふ人もなく、いとわびしき事よと云なり。四ノ句は、異本も一本もよろしくはあらず。末句は、六帖の方まさりざまなり。(十四才)



四〇

ちはやぶるかみな月こそ悲しけれわびし一本我身時雨にふりぬとおもへば

○我身時雨に云々は、時雨の降フルと云如くに、我身も、旧フルくなりぬる事と思へばとなり。古今悉五に、「今はとて我身時雨にふりぬれば云々、ともあり。一首の意は、今年も冬になりて、一年々々と過行事をなげく意なるを、時雨にふりぬといはんとて、かみな月こそ、とはいへりと聞ゆ。初ノ句、ちはやぶると云枕詞の事につきて、いさ、かいふべき事あり。序にいふべし。こは、細注に記すべき事なれども、さては、眞字につけたる片假字などは、むげに小さくなりて、見わき難くもあれば、此所に引つゞけて冠辞考云、万葉卷二に、千磐破チハヤブル、神曾著常云カミソクツトイフ、卷廿に知波夜夫流チハヤフル、神平許等牟氣カミヤコトムケ云々多し。こは此語は、記せ冠辞考云、万葉卷二に、千磐破チハヤブル、神曾著常云カミソクツトイフ、卷廿に知波夜夫流チハヤフル、神平許等牟氣カミヤコトムケ云々多し。こは此語は、古事記に、詔ミコトノリ此ニ葦原ノ中ニ國者ニ、時於此國道速振神等之多在、是使何神而將言趣、また神代記に、勅ミコトノリ天稚彦ニ、略慮オモホス有ニ殘賊強暴橫惡之アラブルカミ神者ニ、故レ汝先ニ往平之サハラス、（十五オ）云々。この同じ事を、古事記には、借字にて、道速云々とかき、紀には、理コトワリを似て、殘賊云々と書たり。この二つを相むかへて、ちはやぶるあらぶるかみとよみ来れるなり。然れば、此辞を、万葉には、さまざまに書つれど、たゞ、崇タカはしく、荒き神てふ意なるを知べし。さて、知波夜夫流の知は、伊知イチチを略けり。その伊知は、伊都イツと音通ひて、強き勢ひをいふが故に、伊都に稜威イヅの字を紀には書つ。波夜とは、古事記に、伊登志和氣王といふ、同じ王を、垂仁紀には、膽武別命イトワケと書たり。是はた、古事記には假字、紀は理もて書つれば訓と義を相照し見るに、膽は、伊都を略けること、右にいふが如し。登志は疾ハヤなり。波夜ハヤきなり。武タケきなり。然れば知波夜の波夜は、その武く疾に同じきぞかし。俗に、氣キのはやき、氣のするどき、などいふ、即これなり。よりて、心膽の疾くはげしく、崇タカは（十五ウ）しきを、ちはやぶるといふ事しるし。且その、夫流フルは辞にて、神左備神さぶる、宮ミヤび宮ミヤふり、夷ヒナび夷夫利などの、夫利フリに同じく、其ありさまをいふなり云々。又、万葉七に、千磐破チハヤブル、金之三崎カネノミサキ乎、過鞆スシノモ、吾者不忘ワレハワスレズ、牡鹿之須賣神シカノヌメガミ。こは、奈良の朝の歌にて、古今集に、「ちはやぶるかも

社、其後に、かしびの宮などいふが如く、神のます所には、此語を冠らしむる事となれるなり。上つ世は、荒ぶる神と、猛き人などにのみ、冠らしめたるを、中つ世より轉り行て、よし惡のわかちなく、神てふ冠辞とのみなりたると見えたり。又、玉ちはふ神といふ枕詞あり。そは同書に、万葉卷十一に、靈治波布、神毛吾者、打棄乞云々、こは、神代紀に、幸魂といへるにて、他の幸をなし給ふ神靈をいふ。こは、其語をかみしもになして、たまさちはふ神とはいひ下したるなり。さてちはふは、十六ささはふのさを略たる語にて、卷九に、男神毛、許賜、女神毛千羽日給而、とよめるに同じ。且、靈幸は、善神をいふ、惡神を、ちはやぶるてふにむかへて是をも冠辞とす、と見えたり。か、れば、善神にはたまちはふ、惡神（惡神ならずとも、あらびには、神まし、事などをいふ時）ちはやぶると冠らすべきことなるを、古今集以後となりては、神とだに申せば、ちはやぶるといふ事の如くなりて、たまちはふといふ詞は、ありとだにしらぬやうになりたり。かくなり来しまゝには、神の御うへの事をも、いかさまなるものぞとも、しらぬやうになりもてゆくが、うれたさに、かくはおどろかしおくになん。

式部卿敦実みこ、忍びて（まかり一本、此女の許に抄）通ふ所侍けるを、のちくたえぐになり侍ければ、いもうとの前齋宮のみこのもとより、此ころはいかにぞ（十六さ）とありければ、その返事に、女、

○敦実ノ親王は、宇多ノ天皇の皇子なり。さきの齋宮は、柔子内親王と申て、敦実ノみこの御妹なり。忍びて通ふ所とある女は、大和物語に、三条ノ右大臣のむすめ、能子と見えたり。この頃はいかにぞとは、猶かはらず、兄みこはおはしますや、といふ意をふくめ給へるなるべし。

しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしちに人も通はず

○我身の古くなり侍ぬれば、親王の跡たえて、今は通はせ給はずと云なり。越路を、来し路にかけていへりと聞ゆ。今まで来し路に、跡絶て、人も通はずといふなるべし。うつほ物語に、山となるゆきぞゆ、しみおもほゆるたえてこしちの物とこそきけ。但此歌なるは、越路を来(コジ)の(ナセ)意にいへりと聞ゆれ。白山は、ばすてよく似たれども、こしちといふ事の使用ひさまは異なるべし。越前国なれば、こしの白山ともいへるなり。或説に、加賀国ともいひ、縣居ノ大人も、今は加賀国に入たるよしいはれたるは、弘仁に後説に、加賀国ともいひ、縣居ノ大人も、今は加賀国に入たるよしいはれたるは、弘仁に後説に、加賀国ともいひ、縣居ノ大人も、今は加賀国に入たるよしいはれたるは、弘仁に

と見えたり

雪の朝、老をなげきて

貫之

四三

ふりそめて友まつ雪はうば玉の我くろ髪のかはるなりけり

○友まつ雪とは、詩に待伴といふ字のあるよりいへりと、契沖法師いはれたり。待伴雪とは、初てふりたる雪の、消ず在て、後々つゞきて降る雪を待つくる事なり。袖中抄などの説も、此意なり。さて此歌は、彼友待雪といふ事によりて、又一つの趣向をよまれたるなるべし。一首の意は、世に友待雪といふ事のあらは、雪の上の事と思ひつる(ナセ)を、よく思へば、年の老て、我が頭に白髪(ハヘ)の生初たるより、打続きて生添ひて、いさ、かなりつる頭の雪の、今は次第に待いで、白髪の多くなりたるよな、といふなるべし。かくて又、師の一説には、まつ友まつ雪といふは、雪の降りたるは、興ある物なれば、ともにめではやす友をまつならひなるを、ましてわが身のふりそめ、年のよりそめては、若き時の如くもあらず、老人の心のならひとして、いとゝかたらふ友のまたる、心になりたれば、友まつ雪といふは、此わが身の、ふりたる頭の雪ぞ、といふにもあるべしといはれたり。此心に見る時は、次のかへしの歌の心も、又の一説のかたをとるべきなり。ともまつ雪とよめる歌は、家持集といふものに、「白雪の色わきがたき梅が枝に

友まつ雪ぞ消残たる、など猶あるべし。(十八才)

かへし

兼輔朝臣

四三

黒かみのいろふりしけるかふる白雪のまち出る友はうとくぞありけるも有かな 六帖

かはる 貫之集

○友はしたしき物なれども、黒髪くろかみの雪の待出る友は、うとましきとなりと、抄には見えたれども、さる意とも聞えぬやうなり。師云、いささかたしかならねども、試にいはい頭の白くなるを、雪の降初てより後々ふる友雪を呼集る如くなりとのたまへども、君の頭の、然やうにならんは、いまだほど遠き事ぞ、といふ意なるべしといはれたり。さて又一説あり。そはかけ歌に、友まつ雪といふは、年ふりたるわが頭の雪ぞといひおくられたるが、そのかしの雪のまち得る友は、うとくしき物ぞとなり。庭の雪は、興ありてめではやすならひなれば、見に来る友もあるならひなれども、かしの雪になりて、年十八才のふりたる人の侍侍る友は、待得がたかるべしとなり。

又

貫之

四四

くろかみと雪との中のうき見れば友鏡をもつらしとぞおもふ

○袖中抄云、友鏡とは、我髪人の髪かみの白きを、雪に見合せたるなり。兼輔の、髪かみの雪の友は疎ましきといへるをうけて、我髪かみの雪の友のうきを見れば、人の頭の雪をも、つらしと思ふとなりと、抄にはあれども、是もたしかならぬさまなり。袖中抄の説も、元来此歌一師云、此歌も二説あり。まつ一説、例の試にいはい、首の上にていへるなり。師云、此歌も二説あり。まつ一説、例の試にいはい、友達の黒き頭と、我か白髪しろかみのうきとをくらべて見れば、てらし合せて見る、友達までをつらく思ふ、と云

なるべし。又の一説には、黒髪の白くなりて、白雪となりたると、庭などの実の白雪とを、くらべて見れば、友かゞみをもつら(十九才)く思ふといふなり。そは、わが頭の白雪は、鏡にて見る物なればなり。鏡にて見るにつきて、わが白髪の見ゆる、鏡のかげもつらしといふを、以前の贈答に、友だちのうへをよみたれば、鏡を見るにも、合せ鏡にて頭を見る事のあるに、其合せかゞみを、常に友かゞみといふにつけて、友といふ事をいはん料に、友鏡とよめるなり。友かゞみならでも、頭の雪は見ゆれども、友をいはん料に、友かゞみとよめるなり。これらの説、見る人の心にまかすべし、といはれたり。友鏡とは、今俗にいふ合せ鏡なみの事なるべし。他に例證などはいまだ見出ざれども、決て合せ鏡の事と聞ゆ。それを今は、てらし合せて見る、友達ともの事にとりなされたりと見えたり。

返し

兼輔朝臣(十九才)

四五

年ごとにしらがの数をはます鏡見るに見つ、そぞ雪の友はしらまししりける六帖

○抄に、貫之の、友鏡といへるにつきて、我も鏡を見て、髪かみの雪の数そふ事を、知おどろきしとなり、とあるが如し。雪の友は知ぬるといふに、我も老人の友となりたる事を知たるよ、と云をかねていはれたるなるべし。此歌も、師の一説あり。又のかへしに、頭の雪を友鏡して見て、しかくといひおこせらる、が、それにつけて思ふに、老人のならひ、年毎に白髪しろ髪の数のまさる事なるを、その白髪を鏡にうつして見れば、頭の雪は、庭などにふれる雪の友達なるよとなり。かしらの雪を鏡にて見れば、実の雪の友が出来て、雪の友なるよとなり、といはれたり。ます鏡は、冠辞考云、真澄鏡マニキてふ意なり云々。そもく古き史などを考るに、上つ代には、八咫鏡ヤタノカミ日像鏡ニヒナガタノカミ此八咫鏡日像鏡ヲ、やたの説、ひがたの説、ナ(二十才)トの文字ヲ、などのみいへり。

さて出雲國造が、神賀詞に、御表知坐麻蘇比乃大御鏡てふは、かの日像の鏡をもて、天つ日を譬ひへるなれば、真澄日之鏡てふ意なりけり。須美の約は志なるを、曾に転して、麻曾マソとはいへり。かくて後には、卷十三、万葉ヲ云也真十見鏡、卷十六に、真墨乃鏡など、字を異に、音を転し書しも、猶意は右にひとし。又冠辭に用るに至て、言を略きて、麻曾鏡といふより、字をもさまざまに備てかけり、と見えたり。今此歌にては、白髪の数益と云かけたるは、いふもさらなり。

## 題しらず

よみ人しらずも抄

## 四六

年ふれど色もかはらぬ松が枝にかゝれる雪を花とこそ見れの葉にやとれる 見ゆ 昔万

かこそ見る 六帖

○色もかはらぬとは、異木は春もえ初るより、花さきなどすれば、四時（三十ウ）をり／＼に、けしき異になるを、松はいつも同じきをいふなり。いつも同じいろなれば、たゞ雪の降つみたる時を、花さきて、色異になれりと見るといふなり。抄に童蒙抄云、松花は一千年にさくと本文ありといふを引たれども、此しかへりの花の事にはあづからざる歌と思はる。

## 四七

霜がれの枝となわびそしら雪の消ぬかぎりも 六帖は花とこそ見ればかり 異

○冬枯の枝も、雪に花と見ゆれば、なわびそと、なぐさめし心なりと、抄にあるが如し。何事かゆゑあるをりの歌にて、よせていへるにもあらんか、なども思ひつれど、よく味ひ見るに、たゞ冬枯の木に、雪のふりかゝれるを見て、其うち見たるまゝをよめりと見ん方、穩なるべし。菅家万葉集に、「霜がれの枝となわびそ白雪を花と雇手見れど（ヤミテ）二十一さあかれぬ、といふもあればなり。

四六

氷こそ今はすらしもみよし野のたぎつ瀬声も聞えず  
たぎつせのたぎつ音さへねはたえぬなり 六帖  
をあしひきの 異

○意明らかなり。今は氷こそすらめといふなり。続後撰春に、「氷とく春たちくらしみよしの、よしの、瀧のおとまざるなり、とあるをも引合せて心得べし。たぎつ瀬のつは、天津空國津神などの例には違ひて、留に通ふつなり。万葉に、たぎち流るゝと云は、ちとりと通ひて、たぎり流るゝなり。又たぎと濁るべし。滝と書も、沸るの意にて、万葉には、多藝とにこるべき字を書り、と縣居大人いはれたり。

四七

夜をさむみ寝覺てきけばをしぞなく拂ひもあへず霜やおくらん

○抄云、我がねざめのたへがたきに、身をつみて、鶯の鳴音をも、上毛の霜をわびてにやと、思ひやる心なり。(二十一ウ)

雪のすこしふる日、女。の許に 異につかはしける

藤原かげもと

四八

かつ消てそらもみだる、あわ雪は物思ふ人のこゝろなりけり  
に 又一本

○雪の、降る片方より、つもりもあへず消るさまは、即わが思ひに消入ながら、思ひ乱て、一方ならず、うはの空なる心に、同じさまぞと、思ひ合せらるゝよ、となり。恋歌なる事は論なし。二ノ句は、空にとある方を用ふべし。あわ雪は、和名抄云、沫雪阿和。其弱事如「水ノ沫」。とあるにて明らけし。  
後世には、春の雪をのみいふ如く心得れど、春降のみには限らずたゞ消やすきを云なり。

師氏朝臣の、かりして、家の前よりまかりけるを聞て

よみ人しらず

哭二

白雪のふりはへてこそとはざらめとくるたよりをすぐざらなん 二五二五

○抄に、ふりはへは、態と、いふ意なり。とくるは、雪の解るに、来るをそへたり。わざとこそとはざらめ、かく来る便宜は過さで、立より給へかしとなりとあり。げに一首の意は、此説の如し。然れども思ふに、詞書に、狩して云々とあれば、四ノ句のとくるは、もし狩によせある詞にはあらじか。とさけびとだちとかへるとぐらとかげとほごなど云詞もあればなり。然れども、鳥来るといふ事は、あるべくも思はれねは、いかゞあらん。こは試におどろかしおくなり。又は、外より来るたよりは、といふにてもあるべし。初句はふりはへといはん料ながら、其をりの空のさまにてもあるべし。ふりはへは、抄にいへるが如く、俗にわざくと、云意なり。古今集上、「春日野の若菜つみにや白たへの袖ふりはへて人の行らん。若紫卷おは 三三三三 源氏ノ君の御文やり給ふ所に、山里人にも、久しうおとづれ給はざりけるを、おほし出て、ふりはへ遣したりければ云々、など猶多くあり。

だいしらず

哭三

思ひつ、ねなくに明る冬の夜の袖のこほりはとけずもあるかな

○物思ひに、いも寝ざるに明ると云を、音を泣くにかけたり。寝なくには不寝に也。袖の氷は、涙をいへるなり。さて此歌は、拾遺恋二、「君恋る涙に氷る冬の夜は心とけたるいやはねらる、などの類にて、恋



の意ならんか。又は、新拾遺（哀傷）、「わかれにし年をは霞へだつれど袖の氷はとけずそ有ける、などいふもあれば、たゞよの常の物思ひのしげき意ならんか。末句、とけずもあらなん、とある本もあれど、そはよろしからず。二十三才

四三

あらたまの年をわたりてあるがうへにふりつむ雪のきえぬたえぬしら山六帖又家持集

○一年の間消えずにあるがうへに、冬になれば、いとふり積る雪の、たえざる山なり、といふ意か。又は、あるがうへにふりつむ雪の、年をわたりてきえざる山ぞ、といふにてもあるべし。しら山は、越前国の白山なり。さて此歌、しら山といふに、雪の白き意をかけたるにはあらず。

四四

まこもかる堀江にうきてぬるぬ抄かものこよひの霜にいかになぶらん

○意明らかなり。まこもかるは、今孤を列ると云其所の物を以て、枕言の如くおきたるなり。「をみなべし」峽野に生る、「あし」かちる難波のみづ川、「かはづなく神なほりえは、浪速堀江なり。」仁徳天皇の御時にほらせ給へる事、紀に見えたり。二十三才

四五

白雲のおりある山と見えつるはふりつむ雪のきえぬなりけり

○おりあるは、下り居るにて、天空（つち）より、山の高嶺に雲の、山に掛りてあるをいふなり。常に白雲の下り居る山ぞと見えしは、降積れる雪の消ざるにてありけるよな、と云なり。昔家万葉、「冬なれば雪降積留（ツメル）ツメル高き嶺たつ白雲と見えわたるらん。

四六

ふるさとのゆきは花とぞふりつもるながむる我も思ひきえつ、

○故郷の荒たる家にて、雪のふる日に、つれづれながめ出したるさまをいへるなり。

四七

ながれゆく水こほりぬる冬さへやなほうき草の跡はとどめぬ

○冬になりて、萍フキクサの枯果たるをよめり。水の流る、時こそさそはるべけれ。氷とちたる冬さへ、枯て、水草のなき心なりと、抄に見えたる二十四さが如くなるべし。又試にいはず、恋歌にて、所定めずありく人などを、恨たるにはあらじかとも思へどもいかゞあらん。

四八

心あてに見ばこそわかれ白雪のいづれか花のちるにたがへる

○雪の木にふりかゝりて散るを、推量に、かれは雪なりと思ひて見ばこそ、それとも見わくべけれ。たゞうち見たるさまは、実に花に異ならねば、見わくべくもあらずと云なり。二句、見ばこそ阿かめ、とある本は誤なるべし。

四九

天の河冬は氷にとちたれや石まにたぎつ音だにもせぬ

○とちたれやは、とちたればにやの意なり。此天河は、河内国なるべし。銀河にてもにや、と抄に見えたり。げに、ふと思へば、天上の銀河の二十四さ如くは聞えざるやうなれども、さりとて、河内国の天河などの事としては、歌の意何のあぢはひもなし。よりてよく思ふに、こはなほ、天漢の事なるべし。然るは、冬になれば、此国の山河など氷とちて、沸なつ瀬の音も絶るなれば、ふと天漢テンカンを仰あぎ見るに、音もせざれば、

さてはかの銀河も、冬は水にとちたるにや、たぎち流る、音も聞えざる事よ、と思ひよせたるなるべし。  
銀河は、常にも音あるものにあらざればいかゞなりなどいはんは、理に過て、風雅の心はへを知らざる論なり。かくざまに、はかなくいふこそ、あはれも深けれ。久かたの月の柱も秋はなほ紅葉すればや照まさるらん、なども同じ心はへなるを思ふべきなり。

四九〇

おしなべて雪のふれ、ば我宿の杉をたづねてとふ人もなし  
松 六帖

○雪のいたくふりつれば、杉をも降うづみて、しるしもわかねば、訪ふ人もなしとなり。古今雜下、「我宿は三輪の山もと恋しくはとぶらひ 二十五 来ませ杉たてる門、を本歌にていへる事は、いふまでもなし。六帖に松をとあるは、写誤にてもあるべし。必杉をといふべきさまなればなり。山里人などの心ばへなるべし。

四九一

冬の池の水にながる、あしがものうきねながらいくよへぬらん

○水に流る、とは、水の上にあるさま、流にしたかふが如く見ゆればいふなるへし。うきねは、鶺鴒などの、水の上に寝る事なり。かくて此歌上句は、うきねといはん序にて、うきねながらには、物思ひをしつ、独寝をのみする事をいへる、恋歌にはあらざらんか。もし恋の意ならんには、二句は、流る、に、泣る、をかねたるにもあるべし。恋の歌と見る時は、三句の文字は、の如くといふ意なり。又、あし鴨をよめる歌なれば、のは用語のの文字なり。あし鴨は、打聴の細注に、二十五の鴨は、蘆辺に住物故に、蘆鴨と云説は、いかがあるべきと見えたるは、さる事なり。千秋翁の、あしたづとは、白き鶴をいへり。蘆の花の白きによれる名なり。万葉にも、白鶴とあり、といはれたるによらば、あしがも、白き鴨をいふならんか。鶴のやうにこそなけれ、鴨にも、くさぐさある中には、や、白きもあれば、ともいふべけれど、此

あしたづの説も、いさ、かあかぬ所あるに似たれば、猶考ふべきなり。万葉に、アシガモ 葦鴨、アシカモ 安之我母、アシカ 阿之賀毛、など書たれば、か文字は、かならず濁るべきなり。

## 四二

山ちかみめづらしげなくふる雪の白くやならん年つもりなばつ、異

○抄に、序歌なるべし。年つもりは、我頭も白くならんとなり、とあるが如し。二十六才

## 四三

松の葉にかゝれる雪のうれをこそ冬の花とはいふべかりけれうへ一六帖

○うれは、宇末なり。されど此歌にては、宇札うれといふ事、さしも用なく聞ゆれば、思ふにこは、曾札それの写誤にもあるべし。一首の意はあきらかなり。

## 四四

ふる雪は消でもしはしまらん花も紅葉も枝になきころ枝にも葉にも

○きえでもは、キエヌ不消してなり。て文字濁るべし。歌の意は明らかなり。新古今冬、「此ころは花も紅葉もえだになししはしなきえそ松のしらゆき。」

## 四五

涙川身なぐばかりのふちはあれど水とけねばゆく方もなしなれど

○抄に、或抄云、涙は深けれど、人のとけ逢はねば、心ゆかずとの心なりとあり。げに恋歌にて、此説の如くなるべし。水とけねばとは、人の二十六才心のとけざるにそへたるなるべし。行方もなしは、或抄の説の如く、心のゆく事ならんか。されど、心のゆくを、たゞゆくかたとのみいひたる例などすこしおぼつ

かなければ、いかゞあらん。もしは、せん方みもなしといふ意なるを、川水の縁にて、ゆくといへるにはあらざらんか。

四六

ふる雪に物おもふ我身おとらめやつもりくつて消ぬばかりぞ

○消ぬばかりは、不消キエヌにはあらず。をれぬばかりちりぬばかり、などの如く、きゆるばかりその意なりと、契沖法師もいはれたるが如し。ぬは、いはゆる畢ハシメの意なり。兼盛集に、「物思ひてよにふる雪のわびしきはつもりくつてきえぬばかりぞ、といふもあり。物思ふ事のつもりつもりて、つひには、我身も消果るのみぞ、といふなり。恋の意なら三十ミナ七ナナさんか。又た、物思ひある人の歌ならんか、定めがたし。

四七

よるならば月とぞ見まし我宿の庭しろたへにふりつもる雪

花とや 六帖 つもるしら 西一本  
しける 貫之集

○古今冬、「朝ぼらけあり明の月と見るまでによし野のさとにふれるしらゆき。  
ふれる白雪 拾遺又一本

四八

梅が枝にふりおける雪を春近み目のうちつけに花かとぞ見る

○目のうちつけには、目のさしあたりにといはんが如し。上春に、「はるたつと聞つるからに春日山消あへぬ雪の花と見ゆらん、とあるは、春の残雪の事にはあれども、意は通へり。

四九

いつしかと山の桜もわがごとく年のこなたに春をまつらん

○我が春を待つ如く、山の桜も、いつかくと、冬よりして、春を待つにてあらんとなり。年のこなたに

五〇

とし深くふりつむ雪を見る時ぞこしのしらねにすむこ、ちする

み一本

ふしの高根に 六帖又貫之集

○こしの白ねは、八雲御抄に、越の白山に同じとあり。

白ねのねは、山の麓の事にはあらず。山の麓を云詞なり。みねも真根に見えたり。万葉に、たかねといふに、高嶺高峯などかけるにでさるといふに、年ふかくは、冬深くとはいはんが如く、年の末の事（二十八）なり。さて、深く

降積といひかけたるなり。

五二

年くれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふしら雪

とや異

ふれる 六帖

すがた

雪かも 一本

○抄云、花のためしは、様の字なり。花の樣鉢にまがふとなりといへり。今思ふに、様の字なりといへるは、心ゆかぬ事ながら、げに、意は、俗に樣鉢ヤウハチといふに似たるさまに聞ゆ。然れども、此詞かくざまにつかひたる例、いまだ得見出ざれば、たしかにはいひがたし。又、春明方といふも、めづらしき遣ひざまなれど、よく思ふに、すべて年にてても夜にても、其終ハツの所に至て、彼方此方の界サカイにていふ時は、何方よりも云詞とおほしきなり。

たとへば、常に、夜の明方といひて、朝の明方とはいはざれども、まさしく今明んとする時には、今朝の猶、後に明方ともいひ、雅言にても、けさの朝けといふ類にて、此歌なるも、春に明方といはんが如くなるべし。

すべて、此注釈又別記にもらせる事、又後々に見聞及（二十）八ウ）びたらん人々の考などは、皆追考に記すべきなり。

春み異近くふるしら雪は小ぐら山みねにこそ花のさかりなりけるけれ一本

○小倉山は、山城なり。一首の意は明らけし。春の近くなりたるによりて、花の盛と見ゆるよしなり。上の、「春あけ方になりぬれば、と云をも見合せて心得べし。

冬五三の池にすむには鳥のつれもなく下氷の下を我はかよはん 六帖にかよはん人そこにかよふと みつね集にしらすな

○此歌は、古今恋三に出て、四句、そこに通ふと、あり。古今古今にては、底に其許にては、底に其許をかけたるなり、鳩鳥の、氷の下を行通ふ如く、人目にかゝりなどせぬやうに、いとひそかに通はん。ゆめ／＼さるけしきを、人に知らする事なかれとなり。上句は序にて、つれもなくは、氷の下を通ふ故に、上へはさも見えぬよしなり。此詞は、序のうへのみにて、歌の意にはあづからずと、二千九遠鏡を 鈴屋大人いはれたり。には鳥は、和名抄、鶺鴒、逸保、野鳥小而好没二水中也と有。俗に、カイツブリといふものなり。

うばたまのよるのみふれる白雪はてる月かげのつもるなりけりたまる 六帖

○意明らかなり。夜のみふれるといふにつきて、月影の積るなるよ、といへるが此歌のたくみなる所なり。

此月の年のあまりにたあら、ざらはうぐひすはそめて一本はや鳴ぞしなましたら抄

○此歌は、十二月に閏月の有けるによめるにて、此月は閏十二月なり。年のあまりにたつとは、十二月シラニツキの一年に余りて、閏月のあるよしなり。立つとは、月の来るをいふ。一うたの意は、此閏月のなくは、はや

正月なるべければ、鶯は鳴べきものとよめるなり。抄の説、非なり。三ノ句、たらざらばとある本も誤なり、と鈴屋大人いはれたり。此歌 二十九ウ 六帖に閏月の題に載たり。三ノ句は、不立者なり。タ、ザラバかくて、抄本には、たらざらばと有て、鹽麻呂云、こは、有餘と不足とをた、かはせたるにて、意は、此閏十二月が、十二月シフニツキの間餘、三十日に不足トシは、今月此月十は、はやく正月なれば、鶯ははや云々、と云意と見んも、然るべきさまなりといへり。タラザラ

五〇六 関こゆる道とはなしに近ながら年にさはりて春をまつかな みぬ一本

○年にさはりてとは、一夜隔てもいまだ春ならぬをいふなり。いと近き所にも関の隔あれば、それにさへらるゝが如く、一夜にても、今年と来年とのへだてあるにさはりて、春を待つことかなとなり。

みくしげ殿の別当に、年をへていひわたり侍けるを、えあはずして、其年の、しはすのつごもりの日つかはしける。三十せ

○御櫛ミクシゲド匣殿は、御服を司る所にて、上臈の女房を、別当とするよし、拾芥抄等に見えたり。此時の別当は、清慎公の女なるよし、大和物語に見えたり。

藤原敦忠朝臣

五〇七 物おもふと過る月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく も異又一本かきく一本なりける哉又の一本

○物思ふとは、物思ふとてなり。え逢はぬ事をのみ思ひて、うつゝとして、月日の過行事をもしらで居つる間に、年は暮果て、はや今日一日になりしとかきけり。さては、いつまでかくのみなげくべき事ぞ、



後撰和歌集卷第八新抄（三十一）

となり。末句、はてぬとかきく、とあるにて、物思ひにのみほれたるさま、あはれに聞ゆるなり。大和物語には、右の歌につけて「となん有ける、又かくなん、「いかにしてかく思ふてふ事をだに人つてならで（三十）君にかたらん。此歌ハ、下恋五三出ナリ」かくいひく、つひにあひにけるあしたに、「けふそへにくれざらめやはと思へどもたへぬは人の心なりけり。此歌モ、下恋四二出ナリ、トモ三枚忠卿ナリ」とあり。

後撰和歌集新抄全

同 別記 二冊

文化十一年甲戌暮秋発行

京都 風月庄左衛門

書 東都 前川六左衛門

肆 浪華 森本 太助

尾張 片野東四郎

付記 本巻の翻刻は楠本はるみさん（聖心女子大学大学院修士課程平成二年修了）の協力を得た。記して謝意を表します。